

自転車を活用したイベントによる地域振興の可能性

森 脇 博 史

(特定非営利活動法人サイクリストビュー 代表理事)

はじめに

特定非営利活動法人（NPO法人）サイクリストビューは、県内の地域資源を活用して自転車の大会を開催し、地域住民とも連携して、地域振興、交流人口の増加を図ることを目指している。2006年2月に認証され、現在まで、毎年様々な大会を開催している。

我々が住む島根県は、人口が少なく高齢化先進県といわれるが、自然、文化、人など優れた地域資源が存在している。近年、自転車は健康や環境への感心の高まりにより、全国的に自転車愛好者が増加しているが、島根県のように人口の少ない地域は自動車が少ないため、逆に自転車にとって望ましい環境ともいえる。また、豊かな自然、文化、人と触れ合える地域、さらに複数の市町村をまたがる広域コースは、全国のサイクリストの期待を決して裏切ることのない素晴らしいコースであり、大会を通じて、交流人口の拡大が期待できる。



全国のサイクリストが集う島根県

我々サイクリストビューは、県内各地の優れた地域資源を活かしながら、これまでのスポーツイベントのように、行政主体でコストがかかり、継続性がない大会ではなく、地域に根ざした地域主体・参加者主体の大会、そして行政の補助金に頼らず継続できる運営体制を目指し取り組んでいる。

設立の経緯

NPO法人設立に至るまでに、1年間だけ島根県の地域振興部と石見の自治体、自転車愛好者などで実行委員会を組織して、自転車の大会を実施した。最初に大手旅行代理店が主催する自転車大会の企画があり、その開催地として、私の知人から「島根での開催はどうだろうか？」という打診があったことに始まる。

私自身は、その当時、自転車愛好者ではなく、所属する会社で地域振興を促すスポーツイベントを企画していて、自転車に関しては特別な知識を持っていなかった。ただ、実施そのものは大変魅力のあるものだったし、開催候補地としては、島根県西部、特に中山間地域が適していることや新しい観光資源を求める地域のニーズに合致していると感じた。ただし、実行委員会形式で、島根県が補助金を拠出できるのは1年だけという期限付

もりわき ひろし 1970年生まれ／関西大学商学部卒業。1992年 大手百貨店に入社、1997年 企画会社勤務を経て、2007年にNPO法人サイクリストビューを設立、代表理事に就任／地域振興等に関する企画会社、(有)Plus value 取締役社長。

き事業だったので、試走会という名目で開催することになった。

2005年8月末に実施した試走会は「石見ライド」という名称になり、できるだけ石見を楽しんでもらえるよう、2日にわたり浜田から大田を往復するという、日本でも初めての往還型のサイクリングとなった。実行委員会の知識が少なかったため、大手自転車雑誌の編集長に相談して参画してもらったこともあって、準備期間が短く、PRもままならなかったにも関わらず、県外からの参加もあり、2日間で百数十人の参加があり、皆さんの感想も非常によいものだった。

大会終了後、この事業を継続するか否かという協議の中で、事業に関わったメンバーを中心としたNPO法人の設立を促され、中心メンバーで協議した結果、私が代表となってNPO法人を設立することとなった。

NPO法人設立1年目

NPO法人は2006年2月に認定され、その名称を「サイクリストビュー」として、初の主催大会である「石見ライド01」を開催した。実行委員会では、オブザーバーに開催地域の自治体関わっていたので、準備も自治体にお任せする部分があったが、主催団体となり、すべての準備が我々の作業となって、作業量が増大することとなった。



NPO法人の主催大会「石見グランfond 2009」で爽快な走りを体感

NPO法人ではあるが、代表である自分を含めて全員が他に仕事を持っている無給スタッフであり、作業のために割ける時間が限られている。自分が会社を退職して自営業となったので、比較的自由な時間ができたものの、事務所のある松江から石見地方まで出かけるだけで2時間以上かかり、それからの作業となると日没までの時間も限られるため、地元で関わっていただける方の必要性を強く感じていた。それでも、2日間で浜田市と大田市間を往復するNPO法人主催の「石見ライド01」は始まった。

しかし、大会2日目、参加者が事故でお亡くなりになるという予想外のアクシデントが発生した。主催側としての責任問題や、自己体力を過信した参加者の認識の甘さなどがメディアなどで取り上げられ、大会自体の開催が継続できるかどうかという事態になった。しかしながら、警察の方々、島根県をはじめとする自治体関係者、亡くなられたご遺族の方が、是非大会を継続してほしいとの嘆願もあって、より厳しく安全対策を行い継続することを決めた。同年、9月に「出雲ワンデイラン」という名称で160キロのサイクリング大会と、「雲南MTBチャレンジ」という自転車レースを出雲地方、雲南市にて初開催した。どちらの大会も安全に運営できたことで、石見の事故に対するマイナスイメージを払拭できただけでなく、NPO法人としても、限られた予算、スタッフで効果的な運営を行う体制や、安全対策の周知に関するアイデアが生まれた。

具体的には、インターネットを積極的に活用し、大会ホームページ上で、You Tube（ユーチューブ）などの動画サイトにコース映像を紹介し、危険箇所やコースに対する予備知識を参加者に確認していただくようにしたり、コース上に誘導用の矢印サインを設置して、立哨誘導員を減らし、スタッフ数をスリム化したりということである。

同時に、地域振興として大会を成立させるために、開催コースの自治体の協力を得てコース上の



参加者564人の「石見グランフوند2011」

休憩所で補給食を提供していただく商店や、婦人グループなどを紹介していただき、バナナやチョコなどのありきたりな補給食ではなく、地産地消を意識した特産品や手作りのケーキなどを補給食として採用した。他の大会と違い、NPO法人だからできる手作り感にこだわり、走り抜ける地域を視覚だけでなく「食」を通じて体感してもらうように配慮した。これは、参加者に他の大会よりも地域を身近に感じてもらうだけでなく、出店された商店さんにも、大会を通じて参加者との交流で地元の味覚をPRすることによって、自転車大会への共感をいただき、地元でも自転車の大会に対する理解と周知を得たいと思ったからであった。

結局、1年目は3大会を実施して、参加人数は全大会で400人程度ではあったものの、県外の参加者が全体の7割であり、大会を通じて宿泊や飲食で経済効果が見られた。参加者の意見を聞いても、毎年継続して開催してほしいとの意見も多く、スケール感はないものの、島根らしさがあり手作り感のある大会を継続することで、規模の拡大が図れるのではないかと期待感が持てるものであった。

2年目以降5年目まで

NPO法人として2年目となる2007年から、より地域に根ざした大会運営を行うことを主眼として、SNS（ソーシャルネットワーキングサービ

ス）のmixi（ミクシイ）にて、大会のコミュニティサイトを立ち上げた。これが、参加者に広まり、情報交換の場として機能する。ここで得られた情報や、各大会の公式サイトに必ず設置している掲示板への書き込みを参考にしながら、よりよい大会運営のあり方やコース設定を行う。

また、この年から飯南町において「飯南ヒルクライム」という、全長13キロ、標高差600メートルの山岳路を登坂する競争、通称ヒルクライムレースを開催することになった。これによって、年間の主要大会は4つとなり、4月から10月までの短い期間でこれら4つの大会をこなしていくというハードなスケジュールとなる。同時に、この年から、財団法人JK Aの補助事業に内定し、大会運営の原資が、参加費だけでなく補助金も入ることで、自転車専門雑誌への広告掲載や、人気のある自転車関連のインターネットサイトに広告を掲載するなど、広く全国の愛好者に向けて大会をPRすることが可能になった。

参加費以外の財源が増えたことで、運営自体に大きな経費をかけることができるようになり、参加人数が少なく、事業収入が限られる大会であっても、他の大きな大会と同じような運営サービスを提供できるようになる。この結果として、第2回大会以降、今年の第6回大会まで、毎年確実に参加人数が増えてきている。人数が増加すること



標高差600mのレース「飯南ヒルクライム」メイン会場

に合わせて、各大会の特徴を明確にした大会名に変更して、参加者が大会名だけで大会内容を把握できるように改善する。石見ライドは「石見グランfond」に、出雲路ワンデイランは「出雲路センチュリーライド」に変更し、大会のジャンルを全国で呼ばれる大会の種別の名称に連動させることで、参加者側が自分のスキルレベルに合わせて大会をセレクトできるように配慮した。

2008年の大会終了後、参加者が我々の大会のコース企画に積極的に関与するようになる。先のSNSで開設した各大会のコミュニティに参加してくれた常連さんでもあり、インターネットのコミュニティで知り合った仲間同士が我々のコース設定に積極的に関わってくれるようになった。特に石見グランfondにおいては、地元ならではのコース設定に尽力をいただいている。これこそ、我々の法人名である「サイクリストビュー（自転車愛好者の目線）」で大会を作っていこうという、我々の趣旨に合致したものであり、それ以来、今年に至るまで、大会それぞれにその地域の自転車愛好者が試走会などに関わり、自転車愛好者が好みそうな起伏に富んだコースメイクに協力していただいている。その結果、ロングライドであっても適切な距離で休憩個所を設定でき、どこまで走っても本物の島根の大自然が堪能できるコースの提供が可能になった。自治体が主催の大会と違い、



食事提供と地域交流の「高山そば道場」

参加者の生の声を可能な限り反映して、大会の運営やコースの改善をしてきた。どの大会でも開会セレモニーなどを簡素化し、走る時間を長く確保できるようにし、参加者のレベルに合わせたコース、島根らしい風景や町並みに出会えるコースになるよう毎回改善している。

また、インターネットの著しい発展も、我々の大会を行うに当たって役に立っている。先に述べたユーチューブなどの動画サイトによる事前のコース紹介だけでなく、大会申し込みは、スポーツエントリーなどのインターネットエントリーを利用。コースマップに関しても、ルートラボというサイクリングコースを電子マップで紹介する無料サービスを積極的に活用して、できるだけコースの全容をホームページ上で公開することで、参加者への安全対策や、直前の試走などに役立っている。

設立5～6年目

NPO法人設立5年目、6年目のここ2年は、これまでの地道な活動がようやく県民へ浸透し始め、多くの県民やコース上の地区をあげて大会に関わってもらえるようになった。

石見グランfondでは、補給食を提供していただく休憩所が、地産地消の食を提供する店舗が大半となった。大田市では手打ちそばを提供する「高山そば道場」、「三瓶バーガー」などであり、浜田市では旭町の「交流プラザまんてん」などである。地域の本物の食を、県外からお越しになる参加者に提供できるだけでなく、生産者、販売者が参加者から「美味しい！」と言っただけの機会を生み出している。

いずれの休憩所でも、提供者の評判もよく「毎年大会に関わりたい」との嬉しい言葉をいただいている。出雲地方で開催する出雲路センチュリーライドでは、雲南市の塩田地区に天然の井戸水を好きなだけ補給できる「給水ポイント」をお願い

したところ、地区をあげて、休憩所を盛り上げていただいた。参加者の楽しそうな様子を見て、地域の良さを直に聞いて、地域の魅力を再認識されたようだ。

自転車というツールを使って遠方から訪れる来訪者にとって、島根のコースは、日本のふるさとともいえる景観があることを実感される方も多いのである。限界集落とも揶揄されるような地区であっても、その土地自体には大きな魅力があり、信号や自動車の往来が少ないコースが、都会から来た自転車愛好者からは天国ともいえる場所なのである。このことが、大会を重ねるごとに実感でき、確信に変わっている。我々が地域資源として見いだしたのは、そんな地域をつなぐ「道」であり、その「道」こそ中山間地域再生の新たなきっかけづくりになるかもしれない。

大会を運営する体制にも大きな変化が現れている。ひとつは、多くの学生が参加してくれるようになったことである。石見グランfondでは浜田市にある島根県立大学の学生や、サイクリング部員、出雲路センチュリーライドでは島根大学のサイクリング部員や市内の専門学校生などである。この両大会では、コースを誘導する立哨誘導員に協力してくれていて、参加者の安全運転やコースアウト防止に役立っている。

飯南ヒルクライムでは、地元の県立飯南高校の生徒が積極的に運営に関わり、コース運営のみならず、ゴール後の休憩コーナーの運営や、表彰式の司会進行まで一手に引き受けてくれている。学生が地域のイベントに参加する意義は十分にあるが、何よりも県外中心の参加者が大会を楽しんでくれるために、スタッフ全員が「おもてなし」の意識を持たないといけないと実感してくれる良い機会となっており、高校側としても、積極的に生徒を送り出してくれている。

学生以外にも、地域の住民が自発的にコース運営に関わっていただけるケースも出てきた。石見グランfondのスタート・ゴール地点である久

手地区では、大会スタート時に、地区住民が旗を持ってスタート地点に集まり、参加者に大声援を送ってくれる。当初、大会に地区として協力したいとの申し入れがあり、具体的な役割を期待されたが、我々としては「まず、大会を見てください」とお願いした。過去6年間を振り返ってみると、参加者が実際にコースを走る姿を見て、大会を認知してもらい、様々な協力や応援をいただいていた。地域全体が自転車の大会を理解していただくことが、まずは一番大事なんだと実感しているので、その通り行っていただくと「すごいね!」とか「来年はもっと関わりたい」との前向きな意見が多く寄せられ、地域を巻き込んだ実行委員会の再構築までご提案いただけるようになった。これこそが我々が考える「自転車の大会開催を通じて地域振興を行っていく」理想像でもある。地域の方から我々の大会運営に関与したいとの思いを受け、我々の積年の努力が報われたと感じている。

今後の展開と展望について

2011年の大会も、無事に終わり、今年は4大会で実に1,400人弱の参加者が我々の大会に足を運んでくれた。しかも県外参加者の比率が70%を超えるものであり、観光振興事業としても評価できるものとなった。これは初年度の3倍以上の数字



地域全体でおもてなし 受付で参加者へ声援

である。

都会地で開催される同じような大会は、1大会で2,000人以上を集客するものがほとんどであり、我々の大会は規模としては決して大きいとはいえない。しかしながら、人口が70万人足らずの島根県で、四季を通じてこれだけの方が来訪されるのは本当に素晴らしいことだと感じている。実際、石見グランフォンドを開催する大田市では、前日の夜の宿泊は市内のビジネスホテルを中心にほとんどが埋まり、出雲市内や遠く浜田市で宿泊される参加者もいる。飯南町でも市内のホテル、キャンプ場は多くの参加者で賑わっている。

これらの地域では、一度に数千人を受け入れる宿泊キャパシティはなく、今現在の規模が適正ではないかとも感じている。前日泊の参加者のほとんどが市内に繰り出して、地産の食や地酒などを楽しんでおり、その楽しさをブログやSNSなどで発信してくれる。そういった意味では、大会を開催することで生まれる経済効果は、その地域にとっては計り知れない恩恵になっているようだ。

また、参加者の中には、毎年参加してくれる常連も多く、同時に複数の大会に参加される方も多い。年間1,400人ではあっても、島根県の様々な場所で開催しており、島根の良さを何度も感じていただいていることを嬉しく思う。それこそ自転車ファンでもあり、島根ファンになっていただいていることでもあるからだ。そのため、各大会の規模は、都市圏の大会のように大きく増やそうとは思わない。石見グランフォンドでは今年、過去最高の564人の参加があつて、年々増加している。出雲路センチュリーライドは590人だった。両大会はどちらも700人程度が理想ではないかと感じている。我々の運営体制の限度があり、これが地域として快く受け入れられる規模ではないかと感じている。

我々の大会の良さは、大きな予算をかけて規模の拡大を追いかけるものではなく、手作り感を大事にして、コース上でも、休憩所でも、島根らし

い田舎の良さを提供していくことだと感じている。そして、受け入れてくれる地域が能動的に大会に参画し、コース上で様々なおもてなしを参加者に施してもらうことが遥かに大事だと思う。

そのおもてなしとは、物品を提供するとか誘導員になってもらうことではなく、地域内の大会コースに足を運んでいただき、参加者に元気な声援と笑顔で手を振ってもらうことなのだ。それが一番参加者にとって思い出に残る地域資源であり、我々の大会が成長できた理由だと思っている。こんなささいなことかと思われるかもしれないが、自転車は中山間地域において、大きな観光地ではない道路や風景を魅力的な観光資源に変えてくれる。ひょっとしたら、サイクリングが観光地の概念を変えるきっかけになるかもしれないのだ。

乗る人の自由度が高く、自動車よりも遅い速度で見える景色には、埋もれていた地域の素晴らしい魅力があるのかもしれない。そして、大会のルートは大会でなくても走ることができるので、コース情報をしっかり周知させれば、大会には参加できなくても年間を通じた利用につながるのである。

どの大会でも、山あいの小さな集落で、老夫婦が玄関前に座って参加者を眺めている。畑仕事をいったん止めて、手を振ってくれる。それこそが島根らしいし、大いなる財産だ。そして、そんな光景を見るに、自転車による観光は、中山間地域いずれの地域においても取り組める可能性を持っていることを感じる。

我々の大会は、大きな財源がなくても開催できる体制が整ってきた。これならば今後も無理なく継続できる自信がついたのだ。後は地域が我々の大会を媒体にして、何を発信していただけるかが、さらなる大会の魅力作り、ブランド化につながっていくであろう。